

第IV部門

歴史都市京都における街並みの連続性に関する分析

株式会社レオパレス 2 1 正会員 ○田中 佑
立命館大学理工学部 フェロー会員 村橋 正武

1. はじめに

京都は我が国の歴史・文化を代表する都市であり、このことは市街地の町家や寺社仏閣等の存在からいえる。特に、町家が連続的に軒を連ねる街並み景観は、京都独自の個性である。しかし、近年、建築基準法の緩和や建築物の規格化が進み、街並み景観を考慮しない更新が進行した。特に、道路側に駐車場や庭等を設け、これまで建築物の壁面が連続することにより形成されていた街並みが崩れはじめている。即ち、京都独自の個性ある街並み景観が喪失している。

そこで、本研究では京都市上京区翔鸞学区を対象に、建築物の壁面の連続性の観点から、市街地がどのように更新しているか分析し、今後の検討課題を抽出することを目的とする。

2. 壁面の連続性に着目する意義

京都は、平安京以来、町家が道路に面して軒を連ねた空間構造を示しており、このことは洛中洛外図屏風や町規等からも伺える。そのため、京都独自の街並み景観を形成・維持するには、①町家が存在すること②建築物が同規模であること③建築物が道路に沿って同位置にあることの3条件を備えていることである。まず、①について、近年町家を活用した事業により町家の需要が伸びていることに加え、長谷見ら¹⁾の研究によって町家建築の法的可能性も示唆されている。次に、②について、表1に示したように、翔鸞学区の建築物の約97%が3階建て以下の建築物であり、旧来からの間口の揃った敷地割が継承されている。一方で③について、図1に示すよう

階数	総建築物数	割合(%)
1階	474	14.40
2階	2199	66.80
3階	514	15.61
4階	88	2.07
5階	25	0.76
6階	4	0.12
7階	5	0.15
8階	2	0.06
9階	0	0.00
10階	0	0.00
11階	1	0.03

に、翔鸞学区の1980年から2000年までの事業所数と世帯数を比較すると事業所数が減少している。職住共存型の町家は、商業的理由より道路に面して建ち並ぶと

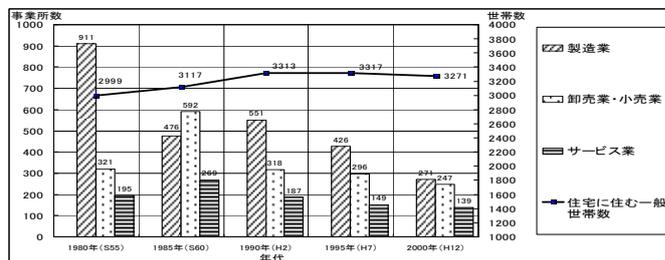


図1 翔鸞学区の事業所・世帯数の変化(1980~2000年)

いった道路と関係性が強い建築物であった。しかし、事業所の減少は、職住共存型の関係性を薄め、道路との関係性の低い普通の住宅が増えていることを示している。

したがって、全ての建築物を町家にすることは不可能であるものも、今後の町家建築の需要と可能性に加え、同規模の建築物が建ち並ぶ条件も整っていることから、壁面の連続性を形成させるといった施策を検討することは、京都が旧来から有してきた街並み景観を形成するために有用であると考えられる。

3. 分析の方法

3-1. 建築物の分類

壁面の連続性を評価する際に、どの年代に更新されたかを判別しておく必要がある。

そこで、新耐震設基準が導入され、建築物形態を左右する大改正が行われた1982年を基準に建築物を分類する。また、80年代は技術革新・情報化の進展により、建築資材の流通が盛んになり、全国的に建築物の規格化が進行した時代であった。さらに、80年代後半には地価高騰の影響が京都にも波及し、これまでの穏やかな更新から一変し、収益を見込んだ高層化・大規模化が進んだ。以上より、82年を境として、対象とする全ての建築物を「全建築物」とし、このうち82年以降に更新したとみられる建築物を「新建築物」、82年以降に更新されたと判定できない建築物を「旧建築物」と分類した。

3-2. 連続性の計測方法及び評価方法

本研究では、建築物の壁面位置と道路中心線まで

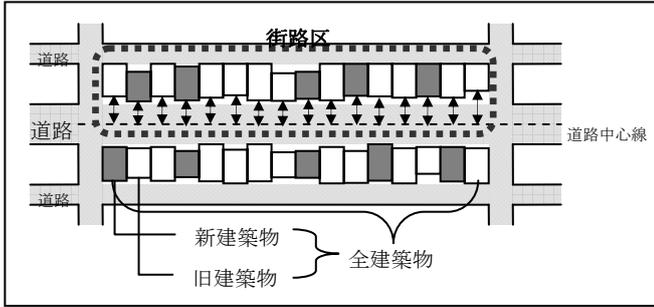


図2 街路区と連続性の計測位置

の距離を測定した。また、評価方法としてばらつきの度合いを表す標準偏差を用いた。つまり、標準偏差の数値が小さいほど連続的であり、数値が大きいほど不連続であると判断する。また、連続性を評価する空間的単位として本研究では図2の点線に示す街路区を単位とした。

4. 街路区の種類 (分析結果)

図3に示すように、標準偏差の大小によって街路区を「不連続形成型」、「連続性維持型」、「連続性分離型」の3種類に分類した。図3①の「不連続形成型」街路区は、街路区的全建築物、新建築物、旧建築物の中で、新建築物の標準偏差が最も高い街路区であり、更新した新建築物の壁面位置の範囲が旧建築物の形成していた壁面位置の範囲以上に不連続な更新を行っている街路区である。次に、図2②の「連続性維持型」街路区は、旧建築物の標準偏差が最も高い街路区であり、更新した新建築物の壁面位置が旧建築物の壁面位置の範囲内で更新を行っている街路区である。図2③の「連続性分離型」街路区は、

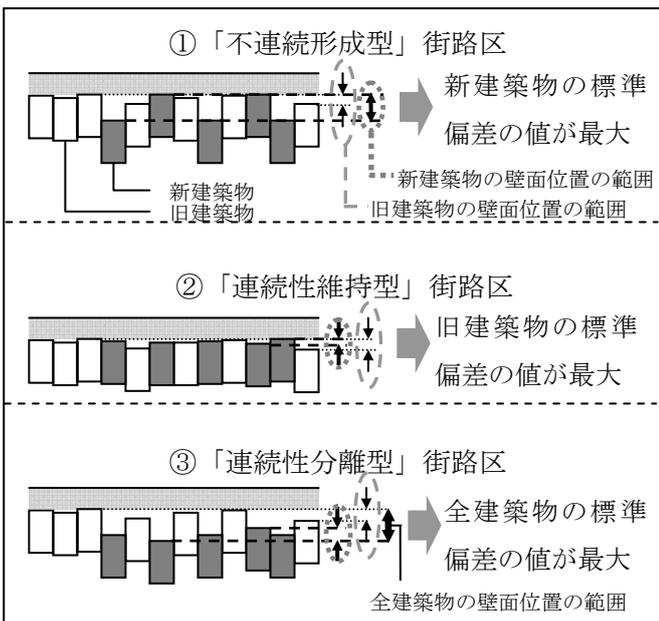


図3 街路区の種類

全建築物の標準偏差が最も高い街路区であり、新建築物が旧建築物の壁面位置と異なる範囲で更新を行っている街路区である。

5. 翔鷹学区の更新の状況

図4は街路区の種類別分布状況を示している。図4では、同じ道路に接する街路区でも、更新の仕方が異なる街路区が存在することを示している。つまり、前面道路だけでなく街路区の数地形態や規模、活用方法等が壁面の連続性に大きく影響することを示している。

6. おわりに

本研究では、壁面の連続性に着目し、京都市上京区翔鷹学区において市街地の更新状況の分析を試みた。その結果、①不連続な更新が行われている街路区(不連続形成型)②旧来の連続性の範囲内で更新が行われている街路区(連続性維持型)③新建築物と旧建築物の連続性がそれぞれ異なる範囲で更新が行われている街路区(連続性分離型)の3タイプが存在することを明らかにした。また、前面道路のみでなく、敷地の形態、活用方法等が不連続な更新の要因となることを明らかにした。



図4 翔鷹学区の街路区種類の分布状況

【参考文献】

1)長谷見雄二他:準防火地域に建設可能な京町家様式の外部部材の開発, 日本建築学会技術報告集No.20, 2004, pp135-140